

一般共通の制度なりしを主張するあり。

成る程ツアドルガに於ては、土地は共有にして其の管理亦共同に行はる。然れども忘る可らざるはツアドルガは唯之れ一家族に限りたるものにして、其の人員は多きも五六十人を超えず。土地の面積亦二十五ヘクタール以上に出づるものなきと之なり。即ち一家族に就きて云へば土地は一家の所有に屬し、之を他に譲渡し贈與し又遺贈するを許さず、一家を去る者は同時に土地に對する權利を失ふ也。然れども斯かる制度たるからには、即ち之れ一家の私有にして、何等土地の公有に就きて語る可き餘地なし。

加之カトライン氏の道ふ所に依れば、ツアドルガは決して之れスラーヴ人に原始的なるものに非ずして、土耳其の治下に立つに至りて後初めて發生せしものなりと云ふ。必竟ビザンチン式の課税組織に其源を置くものなり。之れ近時精密なる史的研究の結果明かにせられたる所にして、頗る信頼するに足るものなり。

次に又ラヴレー氏は瓜哇に於ては土地私有制の行はるゝなく、土地は村落

瓜哇島の土地制度

團體の共有に屬し一定の期間を定めて其の分割を更新するを説けり。然れども氏も亦之を認めたるが如く、此の土地は領主の所有する所にして、其の管理を村落團體に委任されたるに過ぎず、從て村落團體は之に對して一定の納貢を爲さざる可らざる也。即ち此の村落團體 *Desa* は露西亞のミールの如く土地に對して共同責任を負ひ、領主は土地に對して所有權を有するものなり。要するに此の制度は露西亞のミールと頗る相似たる法律關係の下に立つものと云はざる可らず、從てミールに就きて論せらる可き所は此の制度に就きて亦論せらる可きものたる也。

(三)日耳曼人のマルク (*Markgenossenschaft*) — ラヴレー氏は日耳曼人にも亦露西亞及び瓜哇島に於て行はるゝが如き土地共有制と時期を定めて之を分配する制度との存在したりしを主張す。之は十九世紀に於て初めてベロー及ハウツセン (*G. v. Below und Hunsen*) 氏等に依りて唱道され又シーベル (*H. v. Sybel*) 氏に依りて祖述せられたる所なり。然れども日耳曼人の制度に就きてはシーザールのガリア征討記及びタシタスのゲルマニアの外據る可きものなく、然かも之等

日耳曼人のマルク

の記録に於ては終にマルク制度の根跡を認むるに由なし。従て右等學者の説も多くは他民族との比較より得來りたる議論にして、社會主義者は頗る之を歡迎したれども、忠實なる歴史家は齊しく之を否認するに躊躇せず。

ランブレヒト Lamprecht 氏の説に依ればマルク組合は其の起原を十三世紀以前には見出す可らず、大抵十四世紀に之を見出し得可きものにして、然かも皆之れ土地の領主が農民に土地を賦與せしに起元するものなりと。即ち之れ露西亞のミール及び瓜哇の制度に於けるが如く、土地所有は或る領主の私有に屬し、便宜上之を農民に共同責任を條件として貸與せしに外ならざるが如し。

(四)希臘羅馬の農業共産制度 (Agrarkommunismus)——希臘人の間にも土地共有制の行はれたるを主張する者は佛のツイオーレー P. Viollet 氏にして之に對してはフステルツ、クラーンゼー Fustel de Coulanges 氏手痛き反駁を加へ、又近くはポールマン (Pohmann) Geschichte des antiken Kommunismus und Socialismus 2. Bde. München 1893 (1901) 全く止めを刺し了へたり。即ち希臘にては有史以後に於ては何等土地共有制の根跡の認む可き莫き也。但しホーマー時代及び其の以後に於ても家

希臘羅馬の
農業共産制
の

族の共産主義は行はれ、二三代の者が一家の財産を分割する無くして共有し、共同に之を管理したることは勿論之れ有り。然し此の制度と雖も決して之れ一般的のものならず、まして之を古代に行はれたる共産主義の遺物なりとは見る可らざる也。ホーマーのイリアッド及びオヂセー (Homer, Iliad and Odyssey) 等に描かれたる所に就きて考ふるも、到底當時土地共有の行はれたるを證するに足るものなく、其描ける所は却て頗る土地共有制と調和せざるもの而已なり。

古代羅馬に土地共有制の行はれたりと云ふはモムゼン Mommsen 氏以來信せらるゝ所にして、ツイオーレー及びラヴレー氏等は之を祖述せしに外ならず。然れども土地が市民の私有たりしとはシセロの書中に見へたる所に照すも明かなる儀にして、土地は或る國有地を除くの外は皆私有として私人に分割せられたるを知るに難からず。

要するにラヴレー氏等が多數民族に就きて其の土地制度の公有的起原を有するを説き、以て土地は一般に其の原始的制度としては團體の共有なりしとを主張せんとするに對しては、近時頗る有力なる反對あり、特に精細なる史的研究

に照して之を反駁する者少からずして今や殆んど維持し難き苦境に在りと見て大過なかるべし。

吾人は土地公有論を主張するには何も格別史的舉證の必要を見ず。歴史的事實として土地が私有なりしか公有なりしかは之を問ふを要せず原始的制度が公有なりければとて直ちに方今公有制に復歸せざる可らざるを主張し得可きにあらざるが如く原始的制度が私有制なりければとて何も方今土地公有制の行はれざる可らざるを論議するの妨とはならず。凡て制度文物は歴史的發展の過程上時の必要に應じて起り必要と云ふ限度に於て其の存在の理由を有するものにして一とし神聖不可侵の永久的存在を主張し得可きものあらず。従て土地私有の制度が方今の時勢に於て人類一般の福祉と一致せず社會公共の利害と抵觸するものあり土地私有制より出づる弊害の甚大にして爲めに公共一般の利益の毀傷せらるゝ所大なるあらば唯宜しく其の理由に依りて私有制の廢止す可く公有制の採用すべきを主張す可き也。然ひ史的事實を援用して主張の論據を鞏固にせんと欲し爲めに却て反對論者をして乗ず可き弱點を

見出さしむるが如きは吾人の與せざる所なり。

土地公有論は理想論として又方今の病弊に對する救濟策として至大の價値を有す此の意義に於て押しも押されもせぬ立派な地位を有するものなるを忘る可らず。

第六節 コレクティブイズム

土地改良論者特にヘンリー・ジョージ氏は土地の私有制を廢止し之に代ふるに國有等の形式に依る公有主義を以てせんとする者なり。然るに數多き生産的貨物中たゞ土地のみ公有に移すに依りて以て方今の社會組織經濟状態に伴ふ病弊を一掃し去るを得可しと爲すの考には甚だ受取り難き節なきに非ず。若し生産手段の私有行はれそれより生ずる新價値の個人所得に歸するが爲に方今の社會病患の發生するものなりとせば生産手段は土地に限られたるに非ず、數多き生産手段中唯だ土地のみ公有に移したりとて弊害の根本的撲滅は覺束なからん。特に近來の生産界の有様を見れば生産上最も優越の地位を占

土地公有論
とコレク
ティブイ
ズム

め其働の目醒しきものは土地に非ずして他種の生産資本特に機械原料補助原料等の如き之なり之等を私有の儘に遺し私人的なる生産企業を許容するに於ては天下の土地を上げて悉く公有と爲すとも又何をか意味せん。若し生産手段の私有より來る憂患を除かんとならば須らく悉く生産手段を私人の手より奪ひ生産企業は悉く之を國家と云ふ共同生活團體の掌中に移す可き也。之れコレクチヴィズムの起る所以にして其主張の大本は此所に存す。

即ちコレクチヴィズムは土地國有と云ふが如き中途半端な主義を以て満足するを得ざるものなり。コレクチヴィズムは苟も生産の用に供せらるる、所謂生産財は悉く之が私有を禁じ從て之に依りて私人の生産企業を禁止し所得の源たる可き資本は之を社會の有と爲し社會の手に依りて一切の生産企業及び利得の分配を行はんとするものなり。而してコレクチヴィズムなるものは狭義に於ける社會主義として知らるるものにして一切の財貨の私有を廢止し悉く之を社會に歸せしめ富の生産と分配とは一から十まで社會の手に依りて行はれざる可らずと爲す彼の共產主義なるものと區別して相對立せしめらるるもの之なり。

コレクチヴィズムの理論は汎く其の内容は人生々活の各般に涉り社會生活の諸方面を包容するものなり。從て其の全豹を窺はんとは今吾人の志とする所にあらず吾人は唯だ土地の經濟理論を探究し土地所有の關係に於て其の公有論を評論講究するの道に於て即ちコレクチヴィズムの主張に聞かんとするものなれば茲にはたゞ所有と云ふ關係に接觸せる部面のみ就きて其の門戸を叩かんとする也。

以下吾人は少しく所有と云ふ權利關係に就きてコレクチヴィズムの理想とし又そが方今の法制に對して有する見解批評に就きて論述する所あらんと欲す。而して論述の態様はコレクチヴィズムの現制度に對する批評と併せてコレクチヴィズムの主義理想の上に描成せらる可き新社會に於て所有關係の如何に定めらる可きかを示すの方法に依らんとする也。

凡て方今の法律制度は一方に於ては社會公共の利益を維持し他方に於ては各個人の利益を保護するを以て本旨と爲し法律の規定等總て此の本旨に從て

現行所有制の不條理

造られたりと稱せらるゝと雖も、實は之れ一片の飾辭に過ぎず。方今の法律制度に就きて審かに其の真相を察すれば、其の公の利益と稱せらるゝものは、唯之れ少數なる個人若くは階級の利益を意味するに外ならざるを見る。即ち方今の社會組織は一種の三角塔を成せるものにして、上に少數なる支配者の階級あり、下に大多數の社會民衆あり、然かも方今の國家組織は元之れ武力に依りて築き上げられたるものなるが故に、社會の秩序國家の制度は皆之れ命令服從の關係に依りて保たれつゝあり。法律は此の關係を維持するが爲めの規矩準繩たり、従て少數なる支配者に便にして大多數者たる社會民衆に不利なる如くに造られたるや怪むに足らず。仍て改ふるに凡て人が希望し努力する所を其神髓に立入りて見れば、即ち之れ一は以て自己の生存を維持し發展し、一は以て子々孫々の永續を圖らんとするの二者に出でず、換言すれば現在に於ける自己の發展と將來に對する自己の永續とに外ならず。此の二大目的に對する法律關係は一は所有と云ふと之にして他は家族組織と云ふと之なり。従て所有權に關する法規と家族組織に關する法制とは實に以て人類生活の二大要旨に觸るゝ

ものたり。

若し此の二大法律關係が現今の制度に於て眞に能く社會多數者の利益とする所に一致せず、少數支配者の利益便利を主眼に置きて造られたるものなるに於ては、大多數者が之より受くる損害は至大至重なり、大多數者の自己發展の之が爲めに妨げらるゝ所幾許なるや知る可らず、人間生存の本義は之に依りて毀傷せらるゝと云ふに憚らざる也。社會を改造して以て人類の福祉を増進せしめ、文明終局の發達を遂げしめんと希望する者が先づ右の二大關係に對して注意する所あり、之が根本的改造を企圖するに至ると、寔に所以なくんば非ず。

げにや所有に關する問題は舊社會制度を保持せんとするものと新社會制度を建てんとする者との見解の衝突する焦點と云ふに足る可く、其他の物權上債權上親族法上相續法上の問題は云はゞ之を中心とし之に附隨して起り來るものたるに外ならざる也。

社會主義者、共產主義者は所有權なるものを廢止せんと企つるものなり。即ち之等は實に之れ經濟上に於ける平等觀の上に立つものにして、個人々格の自

主平等を得せしめんが爲めには、先づその物質的生存條件に於て平等ならしめざる可らず、それが爲には個人が或る利益を專占する所有權なるものを廢止し、人生々活に必要な貨物に對して各人均等なる利用の道を得せしめざる可らずと爲すは其の主張の根柢たり。而して前者は各個人に對して一切平等なる生存條件を與へんと希望し、後者は各人それ自身先天的に平等ならざるが如く貨物享有の狀態に於ても一切平等なるは宜しからず各人をして各々其の能力功績に應じて公平なる貨物享有に與らしめんと企圖す。然れども共に所有權の廢止を行はんとするの點に於ては兩者見解を一にする所にして、此點に於て所謂社會改良主義なるものと其軌を異にす蓋し之は所有權の基礎の上に漸次社會改良の實を擧げんと欲するに過ぎざれば也。

吾人が先に之を論じ置きたるが如く所有權の觀念は頗る古し。頗る古く又最も長く維持せられたる制度たるには相違なし。而して其の能く維持せられたる所以のものは社會組織國家組織が權力者の力に依りて維持せられ所有權の制度が亦能く支配者の利益に一致したるが爲なり。然りと雖も既に一言せ

しが如く、社會公共の利益は絶對無制限なる所有權の行使を許さず、現行の制度の下に於ても已に之に對する幾多の制限の設けられざる可らざるに至りたることは先に詳論せし所の如し。即ち之れ所有の制度なるものが永久不可侵のものたらざるを立證するものにして、社會進化の法則が之を必要とする限りに於て其の存續を保障されるれども、之を不必要とし之が存續を有害なりとするに至れば、即ちそは漸次制限を被り終には根本的に除去せらるゝに至るの已む可らざるものある也。而して今や所有權に對しては何等所有を有せざる大多數者の利益が其の改造を要求するの時機を迎ふるに至りたり。即ち之れ時勢の要求にして進化の大則の命する所なり。

所有權の起原に就きては吾人之を前章に詳論せし所なるが所有權特に土地に對する所有權が其始暴力と點詐とに依りて獲得せられたるものなりと云ふの見解は、廣く社會主義者若くは土地改良論者の間に行はるゝ所にして、軍人階級が劍戟の力に依りて土地を征略せしか、然らざれば奸邪なる者が狡猾なる計略に依りて之を詐取したるものなりとは、彼等の信じて疑はざる所なり。少く

とも歐洲に於ける大所有地の起原が暴力に依りて成れるものなるは之を史實に徴しても明かなりとせらる。希臘羅馬の時代に武力に依る土地略取の一般に行はれたるは云はずもがな、近く之を過去十世紀ばかりに徴するも例へばノルマン人の英吉利征略(一〇六六の如き宗教改革に依る寺院領地の解放の如き) フォンセンベルクの戦争(一六二〇)後に於けるペーメンの土地没收の如き、佛蘭西革命の結果に依る寺院領地の没收の如き一として適例ならざるは莫し。而して十九世紀に入りて以後は斯かる暴力沙汰の漸く跡を絶つに至りしと雖も、然も尙ほ一八六三年に於ける波蘭一揆の後に其の貴族領の廣く露西亞の爲めに没收せられたるが如き、又一八七七—七八年の露土戦争後バルカン半島に行はれたる回教徒の土地没收の如きあり。

要するに、方今の土地私有状態は決して之れ經濟生活の要求に適應するものに非ずして、所有權の内容は決して之れ經濟生活の必要と相觸れず。過去及び現在の所有權に關する法規は常に各個人の必要に應じて貨物分配の行はるゝに適應せざるのみならず、又其の所有權なるものは所有者の勞働に依りて獲得さ

れたるものに非ざる也。

而して凡て武斷的組織は專制主義に陥り易きと共に、貨物に關しても其の性能本質の如何に顧慮するなく、其の經濟上の用途に頓着なく、十把一括に取扱はるゝを例と爲せども、之れ不條理の太しきものなり。貨物を其の性質の如何經濟用途の如何に顧慮するなく、一樣同等之に對して所有權の許容せらるゝが如きは亂暴も亦甚しと云ふの外なし。たゞ動産と不動産とに就きて些少の區別の認めらるゝが如きは殆んど意味を爲さぬ也。之れ社會主義者其他新社會組織を希望する者の堪へ能はざる所に屬す。

此に於てか新社會に在りては貨物を其の性能用途に従ひて三種に區別し、各各之に對する法律形式を異にせざる可らずとせらる。

第一種類の貨物は其の性能を變化せしむるとなくしては人の利用に役立つしめ得可からざるもの之なり。然も此には全然其の性状を變せしめざる可らざるもの、たゞ部分的に其の性状を變せしむるを以て足るものとあり。前者は例へば食料品、薪炭の如き之にして、狹義に於ける消費財之なり。後者は例へ

貨物の類別
と其の所有
關係

ば衣服の如きもの之にして使用の都度多少づゝ其の性状に變化を生ずるものたり。而して今此の二者を一括して廣義に於ける消費財と稱するも妨なし。此種の貨物はもと之れ人が慾望満足の爲めに之を用ゆるに當りては深く其の性状に立入りて使用するものたり、之を用ゐんが爲めには人と其の貨物との間に頗る密接なる關係の保たれざる可らざるものなれば、新社會に於ても之に對しては個人の所有權を許容するを便宜として又正當と爲すと考へらる。

第二種類の貨物は人が其の性状を變せしむることなくして直接に慾望満足の用に役立たしむるを得る貨物にして、普通に使用財と稱せらるゝもの之なり。例へば家屋、什器、公園動物園其他之に類する娛樂場所、書籍、裝飾品の如きなり。然し乍ら此種の貨物と第一種の貨物との區別とは嚴格には之を立し得可からざるものあるを知らざる可らず。而して此の第二種類の貨物は人が貨物と密接なる排他專占的關係を結ぶなくとも能く之が利用の道を講ずるを得又衆と俱に樂むを得るものなれば、之に對して所有權の認めらる可き理れなく又其の必要なき也。然も現今此種のものに對して私有權の認めらるゝが爲めに

少數者にして益々多くの蓄積を爲し社會生活の闇黒面を造るの弊害を醸すに至りたり。即ち貧富の懸隔之なり。故に新社會に於ては之等の使用財に關しては私人に對して唯だ使用權のみ許容せられ、其の所有權は國家に屬せしめざる可らずとせらる。

第三種類の貨物は方今國民經濟上生産手段と稱せらるゝものにして、之に人力を加へ若くは加へずして新たなる財貨を生ずるの用に任せしめ又之に適應する物財の分配を爲さしめ得るもの之なり。之に屬するものは各種の收益を齎す土地、鑛山、工場其他の營業所、鐵道、汽船、原料品の類なりとす。方今の法律制度が如何に貨物の性能用途を無視せるかは、此種の生産手段に對しても他の財貨即ち消費財及び使用財と同じく一樣に私有權を許容せることに依りて之を窺知するを得可し。然れども新社會組織に於ては十分能く貨物の經濟的性能を認識するものなれば、此種の貨物に對しては絶對的に私人の個別的所有權を容認せず。蓋し私人が生産手段の私有を爲し之を以て生産を營むと云ふことが、即ち現今の經濟組織に於けるあらゆる病弊の生じ來る根源にして、少數者の

手中に富の集積せられ、貧富の懸隔愈々甚しく、社會大多數者は少數なる有資者の爲めに苦役せられ、又利益を壟斷せられ、經濟的に掠奪せらるゝこと蓋し皆な之に發因するものなれば也。されば新社會組織に在りては此種の貨物は擧げて之を國家の有に歸せしむ可きものなり。

洵に方今の法制の下に於て個人に使用財及び生産手段の私有を許容するは、個人が他の個人を屈服せしめ之をして從屬關係に陥らしむるの因を爲すもの也。中世の末期以來方今の新國家發生するに及びては在來私人の手に在りし立法裁判警察等の諸權を國家の手に奪ひ以て個人が他の個人を公法的に凌壓するを得ざるに至らしめたり。然れども方今尙ほ私有關係に於ては此凌壓の行はるゝあり。然らば來る可き時代に於ては先に右等の公權を家長の手中より奪ひ取りたるが如く、使用財及び生産財の私有權より生ずる抑壓の手段を奪ひ、凌壓の機會を個人に許與せざるを期せざる可らざるや理の當然なり。

請ふ吾人をして今少しく詳細に此等三種の財貨の所有關係に就きて語らしめよ。

消費財

右第一種の消費財は貨物本來の性質よりして消費財たるものと之が使用の道如何に依りて消費財ともなり又他種の財ともなり得るものとあり。食料品の如きは其の本來の性質よりして消費財たれども石炭の如きは之を以て煖爐に使用すれば消費財たり之を以て工場の蒸汽機關の燃料に用ゆれば生産財たり。兎も角何れにしても消費財たるものに對しては、新社會の法制に於ても、方今の如く私有權を許容す可しとせらるゝ所なるが私有權の行使には自ら二様の方面あるを知らざる可らず。一は即ち所有者が自己の欲する所に從て之を慾望充足の用に供し或は又之を破毀し投棄する等獨自一己を以て之が處分を爲す場合之にして他は即ち之を他人に賣却し若しくは贈與し或は又擔保に供する等他人との關係に於て之が使用の道を講ずる場合之なり。

而して新社會組織に在りては右二様の方面を共に許容するに吝ならざれども、然かも債務關係はたゞ國家と個人との間にのみ行はる可く、方今の如く個人相互間に行はるゝを許さざるが故に擔保の問題は起り來らず。即ち各個人の所有する消費財の使用に對しては社會一般の利益維持の爲めに多少の制限の

使用財

設けらる可きを知らざる可らざる也。

次に使用財は先に之を述べしが如く直接に人の利用に役立つものなれども然かも多數人が同時に或は相次で之が利用を爲し何等其間に不便の生ずるなく人々互に相妨ぐるの恐なきものなりされば此種の財に對しては人々は唯之が利用をだに爲すを得ば即ち足り格別之に對して獨占排他的の所有權を握り居るの必要なし。従て新勞働國に於ては之が所有權は地方團體若くは國家若くはそれよりも更に大いなる公共團體の有に屬し個人に對しては唯だ使用權をのみ許容す可しとせらるゝ也。而して此種の貨物には自ら又二種の區別の存するあり。一は道路公園橋梁港灣の如きもの之にして多數人が一定數までは同時に之が利用を爲して然かも互に相妨ぐるることなきもの也。此種の貨物に對しては何も殊更に各個人に之が使用權を賦與することを爲さずとも唯だ其の使用を個人の隨意に放任しそれに對して一定の取締規則を設くるを以て事足る可き也。

第二種の使用財は其の性質上たゞ特定の個人若くは家族が之が使用を專に

生産財

するを必要とするもの之にして家屋、什器、書籍、裝飾品、懷中時計の類之なり。此種の使用財は國家が各個人に對して特殊的に之が使用權を賦與せざる可らず、然しその權利は唯だ使用にのみ限られ之が果實の收得を許さず蓋し若し果實を生ずるものあらば、それは即ち生産財に屬すと見る可きものなれば也。

最後に生産手段若くは生産財なるものは先に一言せし如く人工を加へ若くは加へずして新たなる財の生産に用ゐらるゝ財貨を指すものにして之に屬するものは第一には新貨物を生ずるが爲めに用ゐらるゝ各種の土地即ち耕地、牧場、森林、鑛山、河川の類。第二には工場、其他營業の場所。第三には廣義に於ける交通機關即ち鐵道、汽船、道路、舟筏の便ある河流、倉庫、其他貨物の分配に役立つべき一般の設備。第四には生産の爲めに必要な原料品之なり。

凡て生産の最後の目的は直接に人の慾望充足に用立つ可き消費財及び使用財を産出するにあれども、然も此の最後の目的を達する迄には生産技術上諸種の階段を踏まざる可らず。即ち例へば百姓は小麦を碾き粉屋は麥粉を碾き而して最後に麵麩屋が麵麩を焼く也。而して新社會に在りては小麦と麥粉とを

ば生産手段と見、麴麴を以て消費財と爲す也。方今の法律制度の下に在りては此種の生産手段に對して私有權の許容せられ、それと同時に私人的債權の設けられたるが爲めに、一方には何等勞働を爲さざる者が巨多の所得を收むるの奇なる現象を生じ、他方には或る人々が他の多數の人々を經濟的に支配するの勢を生じ、個人が他の個人を使役し、其の利益を掠奪するを以て正當適法の行爲たらしめつゝあり。かの消費財と使用財とに對する所有權は假令私人に許容されたりとも、其の財貨が早晩消滅す可き性質のものにて、生産に依り繰返し、新生産するものにあらざるが故に、右述るが如き弊害を生ずることなく、唯纒かに貨幣と家屋との貸借の行はるゝことのみが其の所有者をして生産手段の所有者と同じ様なる經濟的地位を得せしむるに過ぎざる也。

斯く生産手段は經濟上並びに國家生活上頗る重大なる意義を有するものなるが故に、新勞働國に在りては一切之に對する個人的私有權を認めず、其の所有は總て國家若くは國家の結合體に屬せしむ可きものたり。彼の土地の所有をのみ私人の手より奪ひて之を國家に移さんとするが如きの議論は頗る中途半

端なるものたり、土地と云はず總て右上げたる四種の生産手段は悉く之を上げて國有と爲さざる可らざる也。たゞ土地をのみ國有と爲さんとするが如きは到底以て方今の經濟並びに社會組織に伴ふ病弊を救ふ所以にあらず。病は已に膏肓に入れるを忘る可らざる也。

而して生産手段に關しては個人に其の使用權をも許容す可きにあらず、之を使用すると云ふは即ち之を以て新貨物を生産すると云ふに外ならず、斯くては其の私的所有を廢止するも何の意味をも爲さぬこととなる也。新國家に於ては生産手段の所有と使用とは悉く總て國家の手に屬せしめずんばある可らざる也。即ち新國家組織の下にありては生産手段と云ふ生産手段は悉く之れ絶對的に私人的交通の域外に在る可きものたり。

然らば進んで新社會組織に於ける財貨の分配は果して如何様に爲さる可きかの問題を攻へんに、之は元來社會主義なるものが分配問題に據て立つものなるの結果、實に社會主義的法制の中心點を爲さずんば非ず、從て之に對する解答如何は社會主義的理論の價値を定め、其の本性を明かにするものなるを知らざ

る可らざる也。今簡單に新社會に於ける分配方法の大様を叙せむ。
仍て先づ現今の私有制度と社會主義的分配組織との區別の大本を攷ふるに、
彼は自然に發育成長せるものなるに反して、之は理性の反省に依りて成れる組
織方法たり。前者は立法及び法律學が歴史の壇上に表はれ來れる以前よりし
て存在せしものなるに反して、後者は實に政治的並びに科學的反省の結果に出
でたるものなり。之れ兩者間に於ける根本的相違なるを忘る可らず。

そは兎も角、社會主義の分配組織には主觀的方法と客觀的方法とあるを知ら
ざる可らず。主觀的方法は消費財の所有並びに使用財の使用をして、各個人の
必要とする所に應じて分配せんとするものにして、從て此の方法に於ては分
配に與る可き各個人の主觀的條件例へば其の年齢、男女の性質、愚強弱等が頗る
重き意義を有するものたり。然るに客觀的方法に於ては分配に與る可き各個
人の主觀的狀態を離れ、客觀的なる經濟事實が區別の標準を爲し、各人をして其
の爲せる勞働の量及び性質に應じて分配に與らしめんとする也。從て前者は
頗る簡單なれども、後者は頗る複雑にして面倒なる事情の這間に生じ來るを避

け難可し。特に勞働不能の者は國家社會に於て之を扶養せざる可らざるの必
要生じ來らざるを得ざる也。

試に之を共產主義と社會主義との區別に照して攷ふれば、共產主義は經濟上
に於ける各個人の絶對的平等を標榜するものなるの結果、主觀的分配方法を取
らんと欲し、社會主義は經濟上に於ける公平なる分配をこそ希へ、絶對的なる平
等が必要且つ正當と考ふるものに非ざるよりして、客觀的なる分配方法を選ば
んと欲す。

主觀的分配
方法

先づ主觀的分配方法に就きて見るに之には又放任的のもの、と國家の干渉に
待つものとの二つの區別の立つ可きあり。放任的なる分配方法は讀で字の如
く、各人をして其の欲するが儘に、其の必要とする所を取得せしむるの方法なり。
即ち無爲にして化せんとするものなり。已に方今の制度の下に在りても空氣、
大洋、河川の水の如く、其の存在量の無限なるものは各人の欲するが儘に之を取
得するを得せしめつゝあり、又公園道路の如きも一定の範圍内に於ては各人の
欲するだけ之が使用を爲すを得せしめ、何度道路を通行するも日に幾度公園に

遊ぶも各人の自由なり。此の制度をば十二分に擴張して總ての貨物の自由取得自由使用を許容せんとするが即ち放任的分配方法の本旨とする所なり。されば共産的無政府主義の如きは必らずや此の分配方法を探るの外なし蓋しそは干渉す可き政府組織を有せざれば也。

此の方法は現在の如き私有制の下に慣れたる人々の間に行ふを得可きものならざるや誰しも異存なかる可く此の方法の甘く行はれんが爲めには社會萬人は十分なる社會的教養を受け其の公共心の遺憾なく發達せるを必要の條件と爲す也。然れども若し天下萬人にして皆社會の心を以て心と爲し從心所欲不踰矩に至らば此の分配方法は實に最も理想的のものたるに相違なく人生の幸福之より大なる莫かる可し。

第二の主觀的分配方法は國家の手に依りて各個人に對し其の必要に應じて分配の行はるゝ方法之なり。即ち各個人は自ら生存維持の爲めに必要なるだけは國家より其の支給を受くるを得れども其代り勞働に堪へ得る者は又國家の指定に依る相當の勞働に任せざる可からず然も其の勞働と受くる所の生活

資料との間に相應適合の關係無きや勿論なり。惟ふに人は人として一個の存在を有する以上、人間らしき生存 (Menschentüchtiger Dasein) を爲すの權利ありとは現時漸くに認識せられんとする自然の命令なり。方今已に疾病失職の保險、養老年金等の制の設けらるゝに至れるは蓋し此の認識の證左として表はれ來れる社會的標章たらずんば非ざる也。而して其の生存には年齢身體の強弱等に依り各人の間頗る不同あるを免れざるや言を俟たず。

人間生存の物質的必要の先づ滿されて然る後諸種の高尙なる精神的必要の滿さる可きものなるや勿論なり。然るに方今の法制の下に在りては社會組織が權力關係に依りて出來上り居るの結果として支配者の地位に立つ少數の人はあらゆる些末の慾望まで之を滿し得て尙ほ餘裕あるに拘らず大多數の者は人間らしき生存をすら送り得ぬ實狀あり。來る可き新社會に於ては之を根本的に改善し社會萬人が等しく皆其の生存の保障を得たる上に更に精神的なる諸般の慾望満足を行はる可きものとせらる可きものなり。

要するに各人に對して一定の生活資料を與へ一定の勞働を課せんとするこ

とは國的家主觀的分配方法の本旨とする所なるが、然かも特別に或種の慾望を充さんとするものは公共的勞働以外に尙ほ特別の勞働を爲すを許容さる可き也。斯くて此の方法は動もすれば停滯化石せんとするの恐あれども、それは能く自由放任なる分配方法の漸次之に交り來るに依りて寛和され融和され得可きを疑はず。

客觀的分配方法

次に客觀的分配方法如何と見るに之は總ての土地及び資本の私有廢止されたるか然らざれば少くとも土地の私有制度の廢止せられ其の所有が國家の手に移りたる社會組織の状態を前提とするものなり。然れども眞の社會主義的分配制度は唯單に土地に對する所有權が各市民の間に公平に分配さるゝと云ふが如き状態と和解するを得るものに非ず蓋し此の状態は所有權の廢止を意味せず社會主義の根本的主張と相容れざるものなるを以て也。

客觀的分配組織なるものは即ち土地及びあらゆる資本の國有制を前提とするものにて同時に至勞働收益に對する權利 *das Recht auf den vollen Arbeitsertrag* を基礎として立つものなり。從て此の組織の下に於ては地代及び資本所得と云

ふが如き勞働に伴はざるものは一切發生するを得ず勞働に依りて造り出されたる價値は國家維持の爲めに必要な負擔を控除せる以外は悉く皆勞働者の所得に歸す可きものなり。而して金屬貨幣は廢止せられ其代りに勞働貨幣の用ゐられ然かも價値の尺度は單純なる時間勞働ならずして平均勞働たり、國家は總ての物財及び勤勞を此の平均勞働に割當て、表はし、各勞働者は國家の倉庫よりして彼れの受取りたる平均勞働を表はす、勞働貨幣の額だけ、貨物を取、得するを得る也。

然し右は勞働に堪へ得る人々に對する分配の方法たるに過ぎずして、年少未だ業に堪へず疾病老軀又勞働を爲し得ざる者に對しては、他の方法及び社會的設備に依りて之が救助扶養の道の講せられざる可らざる也。而して又平均勞働の測定に依る勞働貨幣の制定も實際頗る困難の業にして、然かも又勞働効程の着々として進歩するに連れて常に之を改訂し行かざる可らざるの必要あり。尙又論者は此の方法の實行せらるゝ曉には總ての勞働が皆一樣同等に取扱はれ狩野法眼や左甚五郎の勞働も土方工夫の勞働も同様の支拂を受くるに至る

を避け難きのみならず概して學者や美術家の勞働平均時間は肉體勞働者のそれよりも短きを常とするの結果前者は却て後者よりも少き報酬を得て満足せざる可らざるに至る可しと非難す可き也。

要するに多少の非難缺點は免れざれども社會主義の理想とする所が經濟生活上に於ける調和を圖り各個人をして公平を得せしめ方今の組織に伴ふ公平不調和を亡ぼして圓滿なる文物制度を立て以て人類の幸福を増進し社會の進歩を期せんとする其の正心誠意に至りては十分之を尊重するに値あり唯だ其の名を恐れ其聲に怖へて一概に之を排斥し疾視し憎惡するが如きは識者の事にあらざる也。

マキアベリト云へるあり類に汗し自ら働きて活くること無く勞働に伴はざる所得に依りて富み且つ榮ゆる人々の多き國に在りては眞に自由なる國家組織は實現され得可からずと。寔に其言の如し。此種の國に在りては傳習に依りて育成されたる權力に對して新理想に據りて立つ合理的民主主義は常に惡戰苦闘を試みざる可らず惡戰苦闘元より之を辭せず其の闘争にして公明正大

のものたれば即ち之れ社會進化の上に於ける切礎琢磨たらずとせざる也。たゞ危計と黠詐とに出づる陰險なる迫害は到底之を許す可らず。然るに權威者は大抵好むで此謀に出づ責めずんばある可らざる也。

惟ふに土地公有論と云ひコレクチャグイズムと云ふが如きは其の根柢に於て大いなる倫理觀を有し自由平等を以て人生々活の本義とすると云ふ大いなる信念より出でたる熱誠の主張たらずんばあらず。而して現今の私有制度は此の平等觀の人生々活の大義に戻り私有制度あるが爲めに人が人を支配し所有者が非所有者の利益を壟斷し掠奪し社會を割きて所有者の階級と非所有者の階級とに分裂せしめ兩者の間に踰ゆ可らざる一大鴻渠の設けらるゝあり兩階級互に相反目疾視して闘争軋轢止む時なく然も一方は益々富み益々榮ゆるに拘らず他方は益々悲境に沈み益々慘澹に陥るの實狀に在り。之れ現制の不條理にして其内に矛盾あるが爲めに生ずるものたるに外ならざれば宜しく現制の誤れるを廢して土地若くは一切生産手段の公有制の正しきに就かんと欲するものたり。

社會組織の不均にして所有者の階級と非所有者の階級との相分るゝあり其の結果一方が他方を掠奪すとの考即ち労働掠奪の教義。 The doctrine of the exploitation of labour—die Ausbeutung der Arbeit は可也古くより行はるゝ所なりと雖もサンシモン氏出づるに及びて輒ち茲に一の歴史的哲學的構成を見るに至りたり。而して人が人を掠奪するは私有財産制の當然の結果直接の所生として出で来るものなりと考へられ私有制の廢止せられざる限り労働掠奪の事實は到底亡滅に歸するものに非ずと信せらるゝ也。然り而して労働掠奪と云ふとは現實社會の客觀的事實なると同時に又一の倫理觀を含むものにして其の倫理觀は即ち彼の平等觀ならずんば非ざる也。即ち人々の人格はそれ自身に於て神聖なる最高の目的たり従て人は自己自身の願望の領域以外に於て他人の利益便利の爲めに其の道具として使役せらる可きものにあらずと云ふの大確信之にして此の平等觀即ち之れ掠奪説の基石たり。洵に個人々格の平等てふ信念は當然に労働掠奪と云ふ分離す可からざる經濟觀を伴ふものにして此の倫理觀を捨てゝは労働掠奪説は其の意義の大半を失ふものなり。

個人々格の平等と云ふ信念を確定せしは、大哲カントの功なり。カント曰く自然界に於けるあらゆる事物は吾等人類に取りては一の手段として用立つものなり然るに人其者に至りては實に之れ自己自身を以て目的と爲すものにして他の目的に對する手段たる意義を有せず。げにや各個人は如何に卑賤の者なりとも必ずや一の絶対無條件なる價值を有し卓然他物に超越せる或物を具す。其の人としての性質即ち其の人格之なり。而して已に個人々格にして絶対無條件の最上價值を有するものたる以上は人格相互間に何等優越上下の差別ある筈なく各々皆對當平等ならざる可らざるや言を俟たず。

然りと雖も個人々格の平等はたゞ法律上並びに社會交際上に於て之を認められたるのみにては未だ以て之れ砂上の樓閣たるに過ぎず必ずや人生々活の基礎たる經濟關係に於て平等ならざる可らず平等の取扱を受けざる可らず平等の事實の實現せしめられざる可らず。之れ即ち社會主義が經濟組織の改造を要求する所以にして之に依つて甫めて能く平等の倫理觀は現實生活の大則たり得るもの也。

然り而して土地及び資本の私有制度の存する限りは地主と資本主とは何等生産手段を所有せざる勞働者の主人たる地位を捨てず、換言すれば生産手段の私有權は各個人の自由及び平等の權利と兩立し得ざるもの也。從て土地公有論者及びコレクチヴィズムに屬する人々の主張と要求とは人の自由と云ふ根本主要の權利と論理的に結合せられたる自然權の上に其の根據を置くものなるを忘る可らず。

此の根本の倫理觀を酌み其の主張の基礎とする所を了解するにあらずんば、土地公有論と云ひコレクチヴィズムの議論と云ふが如きは到底其の眞意義を解得し得らる可きものにあらざる也。

以上を以て吾人は土地經濟論として論せんと欲したる所を略ぼ遺憾なく講述し得たりと信ず。即ち地代論より入りて地價を論じ土地投機を論じ自然増價に及び増價税に出で更に進みて土地所有の理論と沿革と現状とを討究し終に土地公有論に足るを以て愈々落付く所まで押詰めたり。而して論議する所

自ら精練あり特に農地に關する議論と都市宅地に關する理論との錯綜相交りて取扱に不便を感じたる個所少からず從て筆路の時に多岐に分れ讀者の迷惑を買ひたる所鮮なからざりしなる可きを恐ると雖も然かも推理の徑路は自ら一貫せるあり叙述の體裁亦大體に於て甚しき缺點なきを得たるは著者の竊かに満足する所なり。

唯だ最後に土地公有論を叩きコレクチヴィズムにまで論及するに就いて十分放膽なる筆を振ふを得ず太だ逡巡たるものありしが故に論じて的確精緻なるを得ず學說の紹介とも付かず批評とも付かず論駁とも付かず主張とも付かざる書振りの甚だ徹底せざるものあり著者の性分としては頗る之を齒痒く思へどもさりとて餘りに暢快なるを許さざる事情あり旗幟餘りに鮮明なることの許され難き理由あり唯だ不得要領なるを以て却て得要領と爲すに甘んせざる可らざるや讀者と共に著者の頗る遺憾とする所なり。

若し之が爲めに多少ともに世の誤解を買ふが如きあらば之れ即ち著者の罪にあらずして頑迷と固陋と偏見と無學との罪なり。著者はたゞ學者の爲す可

土地經濟論 土地問題

き所を率正に爲し果すに過ぎず。子曰、苟志於仁矣無惡也。

八一四

(終)

土地經濟論 大尾

明治四十五年五月一日印刷
明治四十五年五月四日發行

「土地經濟論」

定價金貳圓貳拾錢



著者

河田 嗣郎

發行者

大橋 新太郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地
水谷 景長

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
博文館印刷所

發行所

東京市日本橋區本町三丁目

博

文

館

振替貯金口座東京二四〇番
販賣部電話本局二六二〇番

米國エール大學教授 フイツシャー原著
京都帝國大學法學士 河上肇君評釋

●發行所 博文館

資本及利子歩合

全一冊洋裝上製
紙數二百五十二頁
正價金壹圓
郵稅八錢

今の時代は學

者之を稱して

資本主義

の時代と云

社會主義

の鼻祖カール、マルクスの大著は題し

博士

は今の所謂文明の弊の源を以て資本の利子の存在に在りと云ふ。以て資本及利子の研究の今の時代に在つて如何に緊切なるかを知るべし。而して本書は、嘗て

福田博

士

が、資本の本質及

其増殖に關して

最も精細の研究を爲せる者

に多少の評論を以てしたるもの、資本及利子の研究に於て必ず多少の參考たるべし。請ふらくは一讀の榮を賜へと、發行者に代りて評釋者の白す

京都帝國大學
法學博士

戸田海市君著

●發行所 博文館

日本の經濟

全一冊洋裝新刊洋布止製
紙數七百三十三頁
正價金五拾錢
小包料拾貳錢

本書は、我國經濟上の重要問題に就き、徒らに歐米の學說を翻譯羅列せず、我國特殊の自然的及人事的事情を考察して、最も實際に適切なる著者獨特の見解を吐露せられたるもの。即ち歐米諸國と著しく事情を異にせる我國は、經濟發達の根本方針として、果して如何なる程度まで、彼國の制度と技術とを應用するを得べき乎。農工商貿易金融等の各方面に於て、我國は果して如何なる政策を要求する乎。抑々又是等政策を樹立する根本の學理如何等の問題に付き、本書は精細なる解決を與ふる者也。

京都帝國大學
法學博士

戸田海市君著

日本之社會

全一冊新刊洋布上製
紙數六百十四頁
正價金四拾錢
郵稅金拾貳錢

歐米に比して著く異なる國民性を有する我國民の間に、彼國の長所たる人格及權利の思想を發達せしめ、以て公德及商業道徳の振興と憲政及自治制の活用とを圖り、同時に彼の恐るべき危險思想を防止するの方策如何。現に甚だ切迫せる中華社會生活雜の問題と、又日切迫しつゝある労働問題とを解決する方法如何。本書は凡て是等目下の問題に就き、徒らに歐米の學說に追隨することなく、深く我國歴史と現状とに鑑み著者獨特の見識を吐露せられたるものにて皆刻下必讀の大文字也。

博文館發行 帝國百科全書中 經濟財政書類

●經濟 概論

第一編 總論
經濟學の定義○財○經濟學の地位及他の學科との關係○經濟學の區分○經濟學の研究法○經濟學の發達
第二編 生産論
概論 自然勢力 資本 企業

法學士 池袋秀太郎君著

●商業經濟學

第一編 商業の概念
第一章 商業の意義 經濟上の意義 法律上の意義
第二章 商業の種類 形式上の種類 實質上の種類
第三章 商業の發達 商業の同利者 同時期 同沿革
第四章 商業經濟の理由
第二章 商業經濟の要素 商業經濟の關係

法學士 清水泰吉君著

●財政學

第一編 財政及財政學の關係
第一編 財政學の關係
第二編 財政學の分類(六部に分つ)

法學士 小川市太郎君著

●國債論

第一章 國債論の範圍
第二章 國債の法規
第三章 國債の起債
第四章 國債の起債
第五章 國債の種類

法學士 工藤重義君著

●國債

第一編 總論
第二章 國債の起債
第三章 國債の起債
第四章 國債の起債
第五章 國債の種類

法學士 工藤重義君著

●金融

第一章 金融の原理
第二章 國庫金の收支
第三章 國庫金の收支
第四章 國庫金の收支
第五章 國庫金の收支
第六章 國庫金の收支
第七章 國庫金の收支
第八章 國庫金の收支

法學士 佐々木雄二郎君著

●會計法論

第一章 緒論
第二章 豫算論
第三章 支出論
第四章 收入論

法學士 工藤重義君著

●經濟學

第一編 緒論
第二章 近世
第三章 近世

法學士 小川市太郎君著

●經濟政策概論

第一編 總論
第二章 貨幣政策
第三章 銀行政策
第四章 運輸交通政策
第五章 農業政策

法學士 守屋源次郎君著

●法制經濟概論

第一編 總論
第二章 法律の分類、法律の意義、法律の淵源
第三章 憲法
第四章 行政法
第五章 民法
第六章 債權、債務、親族

法學士 大原彌一郎君著

●世界産業制度論

第一章 緒論
第二章 産業の沿革
第三章 産業の沿革
第四章 産業の沿革
第五章 産業の沿革
第六章 産業の沿革
第七章 産業の沿革
第八章 産業の沿革

法學士 相良維男君著

●會計法

第一章 緒論
第二章 豫算論
第三章 支出論
第四章 收入論

法學士 工藤重義君著

價定 並製 特製 各册洋裝 各册美金四拾錢 郵稅各金八錢 各册五拾五錢 小包料各金八錢

岡本米藏君著

(紐育市街全圖市街建築審判照寫版數十個挿入)

紐育市内外の地所

全一册洋装菊判上製
正金九十錢
郵税六錢

米國は世界の最富國なり、米人は世界の最活動民なり、而して兩者の間に生れたるものを紐育市とす。紐育市が僅々三百年間に一躍して、優に世界の冠都と變じ、二十世紀の世界の中央市場と化したる所以自ら明かなり。而も紐育市は尙過渡時代なり、春秋に富む青年時代なり。米國の富力の膨脹と併じ、自然未だ發展するは將に向後のことと屬す。而して米國の富力、米人の活動、紐育市の發展の恩澤に遺憾なく絶えず浴するものは、即ち紐育市内外之地所なり。この故に紐育市内外之地所は、正に世界の寶の山なり。世界の寶の山を知らんと欲する者は須らく本書を讀む可し、本書は、資本なる種之しき國民に正に毒く可き畝を與ふるものなり。理想に近き外資輸入を營まむと欲する者、最小の代價を拂ひて最大の領土を世界の所謂目實の場處に獲得せむと望む者、將た所謂日米問題を最も上手に解決せむと希ふ者は、何れも必ず本書を一讀せざるべからず。

●發行所 博文館

東京交換所編

●發行所 博文館

歐米國債整理始末

全一册菊判上製美本
紙數二百九十二頁
正金八拾錢
郵税金八錢

本書内容

- 國債調査始末 (國債現在額)
- 歐米諸國の國債に関する調査
 - (1) 英國公債：マスタート、田中種稔君
 - 獨立戰爭當時の公債
 - 米英戰爭當時の公債發行
 - 米英戰爭後の公債整理
 - 南北戰爭當時の公債整理
 - 南北戰爭後の公債整理
 - 兌換制度の回復
 - 結論
 - (2) 英國公債整理事情：堀江 歸一
 - 千八百八十八年以前の公債整理
 - 千八百八十八年以前の公債整理
 - (3) 露國公債整理事情：河津 暹君
 - 千八百八十九年以前國債の沿革
 - 國債整理願末
 - (4) 佛國の國債：高野岩三郎君
 - 普佛戰爭以前(國債の概況、減債基金制度)
 - 普佛戰爭以後
 - 結論
 - (5) 普魯士及獨逸の公債整理：山崎覺次郎君
 - 普魯士王國公債沿革
 - 普魯士王國公債の借換償還及管理
 - 獨逸帝國の公債
 - 結論
 - (6) バイエルン國の國債整理：星野勉三君
 - ドクトル、ライ
 - ロツワイエ
 - (7) 埃國國債事情：鹽澤昌貞君
 - (8) 伊太利國債償却に就て：矢作榮藏君

●附録 重要記事二項

工 8N 46

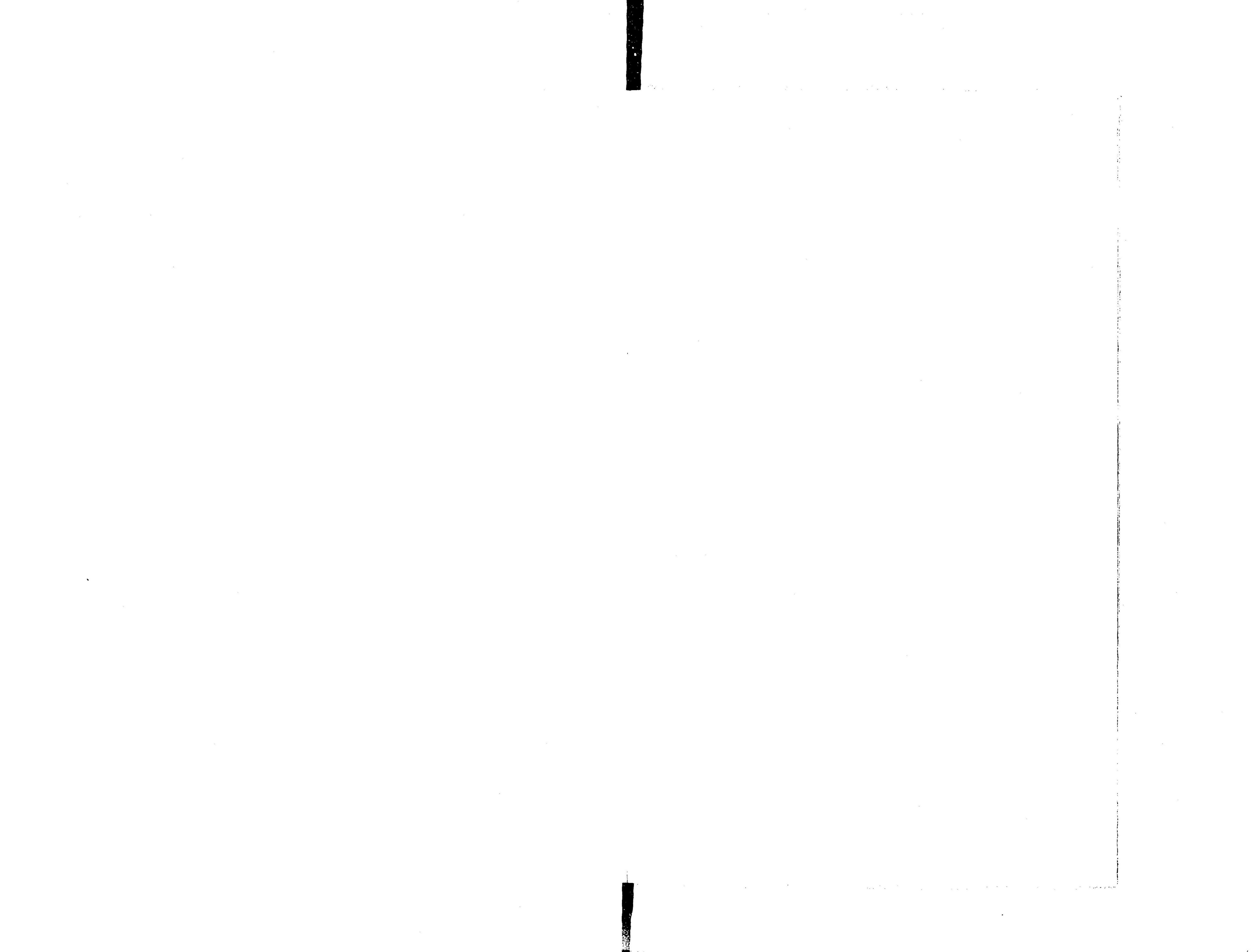
法學士 星子末雄君 共著
商學士 松崎壽君 共著
●發行所 博文館

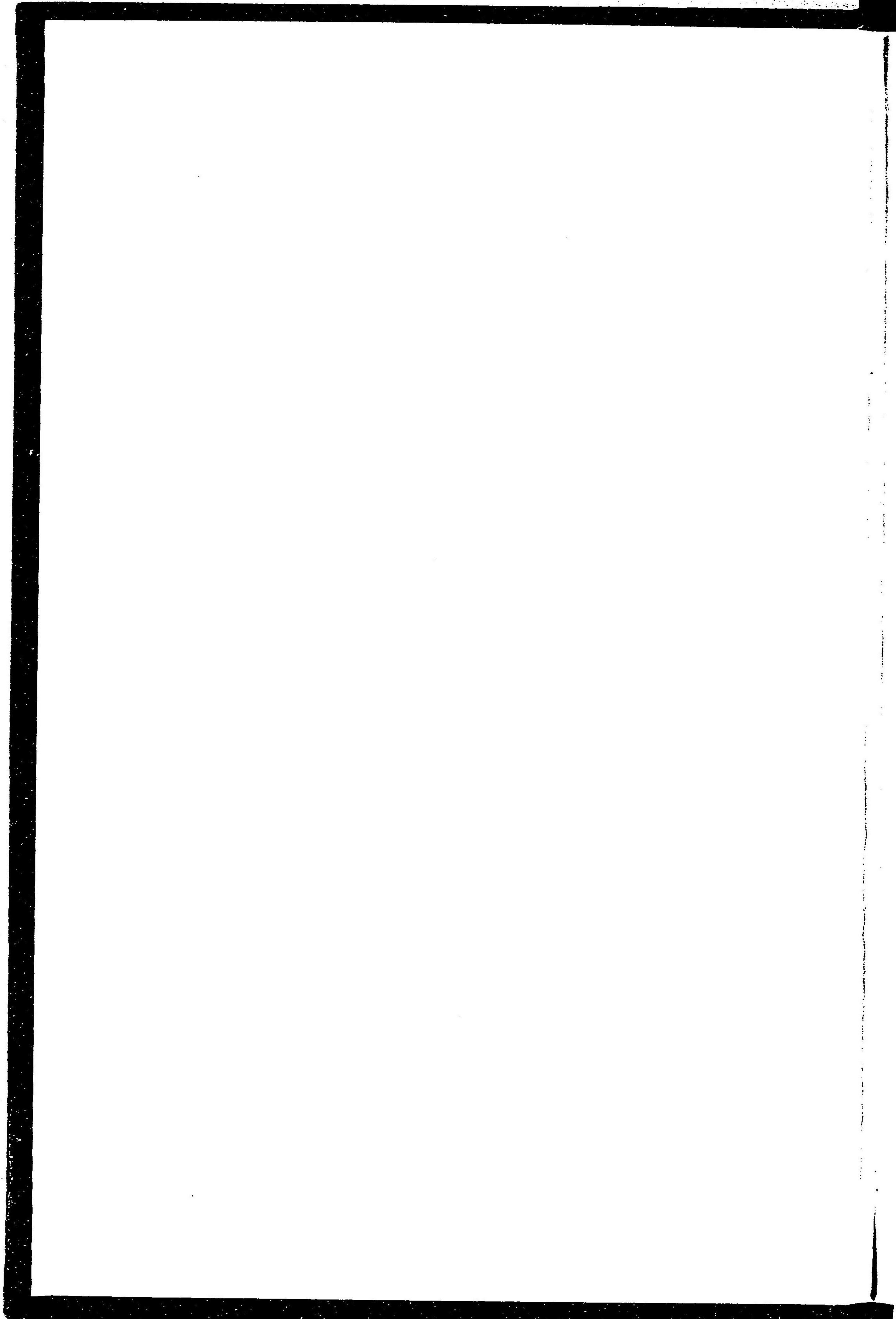
商業經濟學綱要

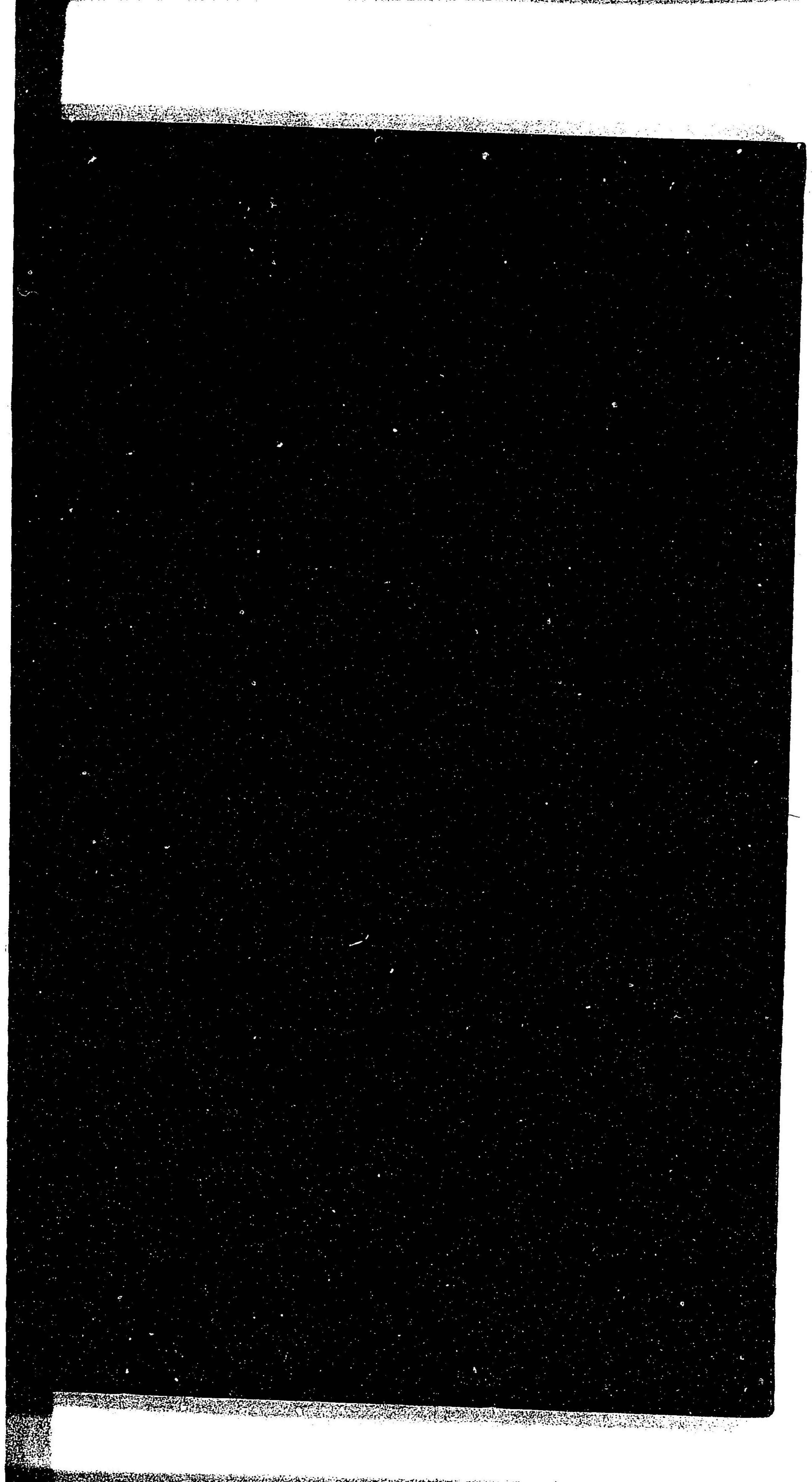
全三冊 洋裝菊版上製
正各金五拾五錢
郵稅六錢

上卷 經濟原論之部
下卷 商工政策及財政學之部

文部省公布の經濟學教授要目による甲種商業學校教科書は、世上其撰に乏し。本書は同要目に基き、**最新の學理を平易簡明**なる筆を以て論述したるものにして、上下兩卷合せて紙數三百頁に充たすと雖も、而かもよく**經濟原論商工政策及財政學**の三大部に梗概を收め得たるは、蓋し一大特色と云ふべし。殊に著者兩學士は斯學專攻の士、其内容の豊富にして正確なるは、敢て吾人の努々を俟たざる所なり。**商業學校教科書**として適當**最新經濟學の大要**を窺はむとする人**絶好の參考書**たるべし。希はくは採用の榮を賜へ。







336

101

041504-000-5

336-101

土地經濟論

河田 嗣郎/著

M45.5

BDG-0124

